

## 第2章 層位と遺構

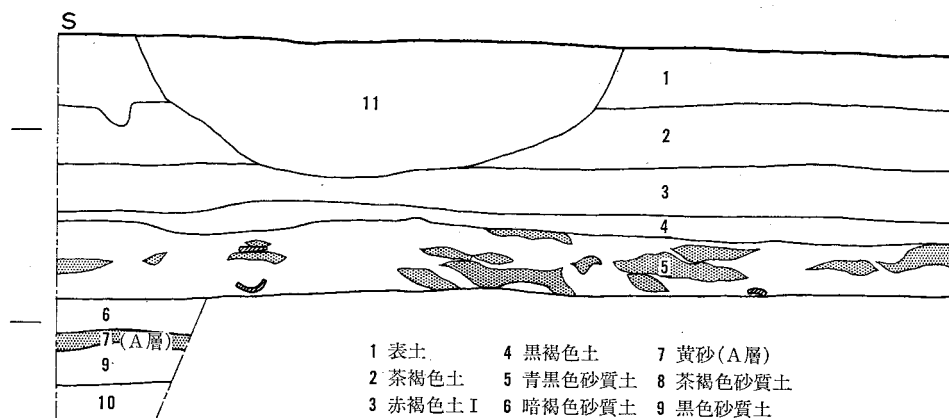
### 1 層位(第4・5図)

ガラス温室予定地は、地表下20cmに至る表土(第1層)と黄砂(第8層)との間に、厚さ10~15cmの水平層が5層あり、部分的には6層にわかれる(第5図)。茶褐色土(第2層)には遺物が少ない。灰褐色土(第3層)から中世の土師器片が若干出土し、赤褐色土Ⅰ(第4層)に至って土師器片はその数を増す。赤褐色土Ⅱ(第5層)は発掘区北端にある部分的な堆積で、埋設管予定地にはない。平安時代の瓦片は黒褐色土(第6層)において出土し始める。瓦溜(BG36区SK1)は暗褐色砂質土(第7層)を切って作られている。

暗褐色土の下方には黄砂(第8層・A層)<sup>(1)</sup>が30cmの厚さで堆積する。この黄砂直下に黒色砂質土(第10層)が続くが、この層から縄文時代の粗製深鉢片が1点出土した。この層は有機物が少なく縄文時代の生活面であるとは断言できないが、少なくともそれに近い時代の堆積層とみてよい。以下は遺物を包含しない暗褐色土(第11層)、淡茶褐色土(第12層)、灰白色砂(第13層)、白砂(第14層)が続き、地表下2.5mに達する。



第3図 調査地点と周辺の地域(昭和53年撮影) 縮尺1/10000

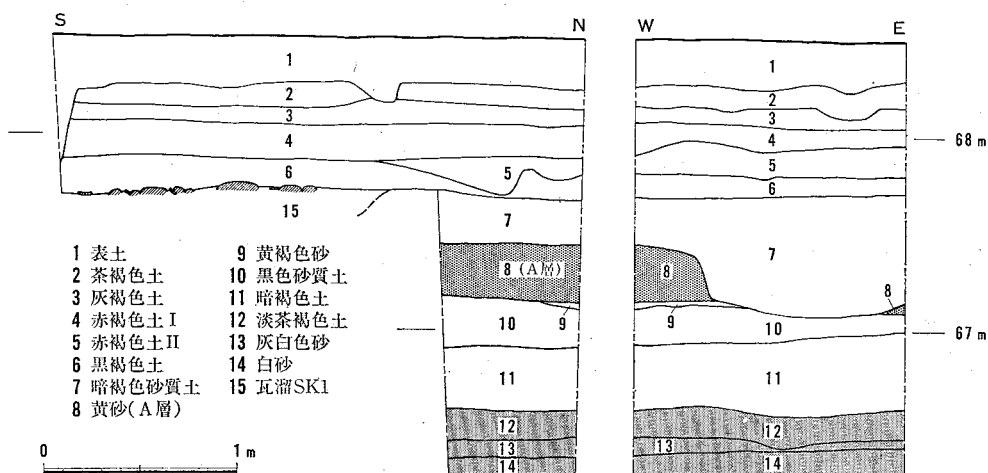


第4図 埋設管予定

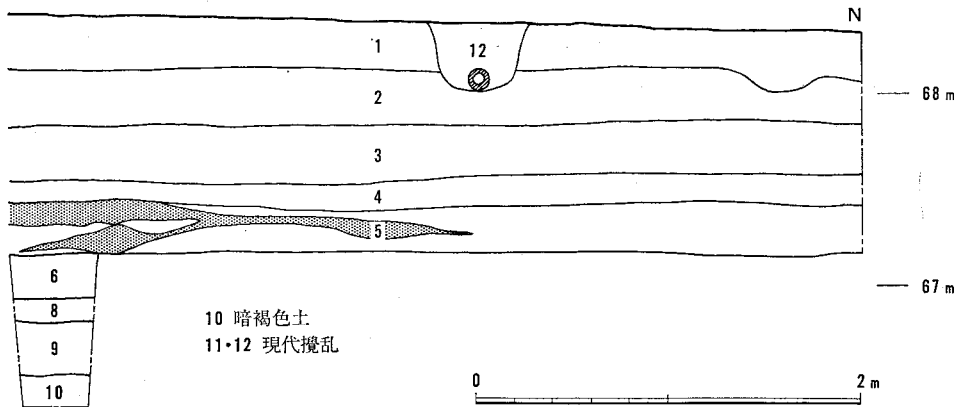
埋設管予定地の層位は、ガラス温室予定地とほぼ対応する(第4図)。しかしガラス温室予定地の灰褐色土(第3層)と赤褐色土II(第5層)がなく、ガラス温室予定地にはない青黒色砂質土(第4図第5層)がある。この層は暗褐色砂質土の直上に堆積し、瓦溜の形成直後の堆積層と考えている。

## 2 遺構(第6図, 図版1の2・3)

発掘区内で検出した遺構は瓦溜(BG36区SK1)である。ガラス温室予定地の発掘区南半部の地表下約0.8m, 暗褐色砂質土(第7層)上面で検出した。瓦溜の掘形の肩は東北部を確認したが、発掘区が狭くその拡がりには判らない。深さについても完掘しなかったため



第5図 ガラス温室予定地の層位 縮尺1/40

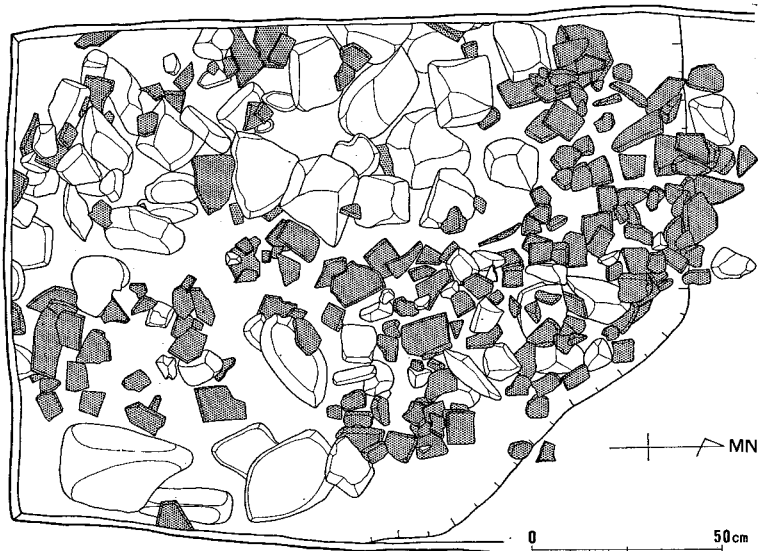


地の層位 縮尺1/40

不明である。瓦溜には人頭大の礫と瓦が混在している。瓦溜の上面でみると、肩の付近には瓦が多く、中央に近い部分には礫が多い。

先述したとおり、現状保存を前提としたため完掘することをさけた。したがって遺物も瓦溜の堆積の上部におけるもののみ採集するにとどめ、あとはそのまま埋め戻した。採りあげた遺物は土器類のほか、瓦が120点余りである。これらは平安中期のものを少量含むが、大多数は平安後期～鎌倉初頭のものである。発掘区が狭く、本瓦溜以外の遺構は確認できなかった。

第6図  
ガラス温室予定地  
の瓦溜平面  
縮尺1/20



## 〔注〕

- (1) 京都大学北部構内は北白川扇状地の末端に位置する。この北部構内から教養部構内にかけての地域では、弥生前期末もしくは中期初頭以後に厚い黄砂層が堆積する。この黄砂層は、この地域の土層の堆積を把握する鍵となる層である〔泉78〕ため、今後A層として表示する。従来の知見ではA層の堆積後に形成された遺構や土層からは古墳時代後期の遺物が発見されていた〔京大埋文年報77・78〕が、最近の調査でA層を切る遺構から弥生中期の土器が出土した。したがってA層の堆積が弥生中期に終わる地点があることが判明したが、この地点は扇状地の高い位置にあたる。そのためA層の堆積の終了については、すべての地点で弥生中期であるか、地点によっては古墳時代後期に降るかを検討する必要が生じている。このほかA層に関しては原地形が高いため堆積が薄いもしくは削平されている地点と、河道や後背低地に厚く堆積する地点とがあることが判っている〔泉78〕。なお北部構内と教養部構内の間に位置する本部構内にはより新らしい時期の流路と砂層の堆積がある。